



屏風絵を読むにあたって 「江差桧山屏風」の読み取り体験から



田島 佳也 (神奈川大学日本常民文化研究所 教授 / COE事業推進担当者)

1 「江差桧山屏風」について

日本常民文化研究所は絵巻物から、辞書ならぬ絵引をつくるという新しい発想のもと、専門家を集め、中世の絵巻物から部分図をくり抜き、時間をかけて『絵巻物による日本常民生活絵引』(平凡社、1984年)全5巻付録索引を上梓した。COEに採択されて、新たに図像の読み解きのための試行錯誤を続けてきたが、正直、かなり困難な作業であることを切実に実感している。しかも、図像の読み解きに、未だこれといった妙案も浮かばず、往生しているのが実態である。

しかし、いつまでも往生しておられず、試行錯誤であれ、自分なりに「江差桧山屏風」(以下、「江桧図」と略称)を対象に、実際に図像を読み取ってみようと思つた。ただ、この屏風の名称は以下のように、いまだ定まった名称はない。

「江桧図」は現在、市立函館図書館が模写を所蔵している。この模写は『江差町史』(江差町、1982年)第5巻通説1の扉裏に掲載されている。そこには、小玉貞良、70歳の晩年に描いた宝暦年間(1751~63年)の「江差屏風」(宝暦年間に松前と江差で活躍した近江商人田付家の末裔、彦根市の田付欣三氏の所蔵。「江図」と略称)とともに、作者・年代とも不詳の「江差屏風とヒノキ山屏風」としてカラー印刷写真で紹介されている。6折1双の4尺屏風絵である。なお、「江差屏風」に関しては「松前江差屏風」とも、「江差松前屏風」ともいわれ、そこに「龍園齋行年七十歳筆」の落款があることから貞良70歳の作品ともいう。また、『江差町史』(江差町、1978年)資料編第2巻の「江差商人取引文書」の解題には、根拠は示されていないが、「宝暦三年(1751)に描いたといわれる」とある。

ところで、「江桧図」はすでに『新撰北海道史』(北海道、1937年)第2巻通説1に、モノクロ写真の「江差屏風」とヒノキ山からの散流しさんながを描いた写真の「檜山土場之図」が掲載されている。⁽¹⁾「江桧図」には向かって右半双に、江差前浜の柿葺きの蔵や丸小屋、賑やかな鯨漁と鯨加工やその運搬、南蛮売りなどが、左半双に江差陪山(桧山)

すなわち目名山、厚沢部畑内(羽板内)から厚沢部川に散流した伐木を鳶竿で筏下組みしている河口土場と一部河口近辺前浜での鯨加工の様子が活描されている。近年の日本史の教科書にも掲載され⁽²⁾一般に知られるようになった右半双は「江差浜鯨漁之図」とも呼ばれている。これを『新撰北海道史』掲載の写真と比較すると、屏風右上の雲の形と人、左下の鯨群来で白濁した海の描き方や雲の形が微妙に異なっている。『新撰北海道史』掲載の写真は原本を写したものに違いない。だが、いま現在、この掲載写真とネガも所在不明である。また、「江桧図」の原図も前掲『江差町史』には石川県の能登地方に所蔵されていたが、現在、その所在は不明とある。能登の歴史研究家、和嶋俊二氏のご教示によると、もともとこの屏風は珠洲市正院出身の江差草分けの商人、岸田三右衛門と同郷の素封家・西村靖治家が所蔵していたもので、大正期に家産の傾きから正院に出入りしていた富山の廻船に売られたと聞いているという。西村家は南部にも縁があったと伝えられているが、史料の散逸からその実態は不明である。ご教示の内容からいえば、この屏風は富山県のどこかに秘蔵されているか、骨董品屋を通じて海外に流出した可能性が高い。

ここでは、この「江桧図」の読み取りの中から気づいたことを1、2点纏述してみたい。

2 気づいた点その1 作成年代について

絵図を読み解く場合、その絵図に作成年代が記されている場合は良いが、記されていない場合、いつごろ描かれた絵図であるかを絞り込む必要がある。というのも、描かれた時代によって絵図の発信する情報が異なっているからである。それを正しく認識する上でも作成年代を絞り込む必要性がでてくる。皮肉にも、作成年代の絞り込みや読み解きには、描かれた地域の市町村史や探検・紀行・地誌、生業や服飾、生活史研究などの文献史資料に頼らざるを得ない。

さて、「江桧図」は年代不詳であるが、「納簾に書かれ

た屋号、手法等から見て龍園齋の描いた江差屏風よりも古く、或は其手本となったものではないか」(前掲『新撰北海道史』)ともいわれ、また屏風絵の筆致から、これも「小玉貞良初期の作であろう」(前掲『江差町史』)とも考えられている。つまり 作者を特定していないが、宝暦年間の作成になる貞良作「江図」より古く、「江図」の手本になった屏風図とする説と、小玉貞良の初期作とする説がある。どちらも貞良の作とは断定していない。

生没年が不明なこの貞良は風俗画家で、『日本画家名鑑』によれば、天和2年(1682)に松前に生まれ、宝暦元年70歳で「松前江差屏風」を描くとあり、73歳まで活躍したという。⁽³⁾あるいは松前に居住し、狩野派に絵を学んだアイヌ絵師で、龍園齋と号し、宝暦年間に活躍したという。⁽⁴⁾この貞良はほかに、「アイヌ絵」といわれる絵を多く描いている。前掲『新撰北海道史』の目次後にはそのひとつ、松前藩主に土産を奉って謁見(ウイマム)するアイヌ酋長を描いた「松前藩主蝦夷人懐柔之図」が掲げられている。これには貞享3年(1686)か、「其年号より余り遠くない頃の作であらふ」⁽⁵⁾とある。これに対して、『アイヌ絵』⁽⁶⁾の著者、越崎宗一氏は貞享3年前後では貞良は生まれていないか、幼児であり、延享元年(1744)の藩主資広時代とみるべき、としている。根拠を示していないが、恐らく越崎氏は先の貞良、天和2年生誕説に則って考証していると思われる(のちに氏は、元禄3年生誕説を主張している。⁽⁷⁾) 現在のところ、貞良の生誕年については確定できないが、先学の研究から天和2年から元禄初め(1682~92)までと推定できる。とにかく、貞良はアイヌ風俗画の先祖で、ひとつの形式を作り出した画家であるとの評価を得ている。⁽⁸⁾

それでは「江絵図」は貞良の作であるのかどうか。詳細に「江図」と比較・検討すれば、タッチは異なっているように見受けられる。貞良は工房を持っていたといわれるので、弟子たちとの共同作業であるならば異なることもそれほど問題ではない。しかし、「江絵図」が現時点で貞良作とは確定できないが、その可能性も否定しがたい。

蝦夷地と松前地に区別されていた近世北海道の松前地西部は鯨漁が村落を越えた入会漁業地であり、鯨刺網漁が盛んになったのが宝暦(1751~63)以降である。しかも、刺網漁しか公許されず、建網(大網)が江差前浜漁に公許されたのは慶応2年(1865)である。「江絵図」には建網の描写がないから、これ以前の作である。この間の期間はかなり長い。ただ、鯨漁は豊凶が激しく、安永

~文化期(1772~1817年)は薄漁・凶漁がたびたび続き、「活況」というにはほど遠かったと思われる。しかし、「鮭てふ魚は、此島のいのち」⁽⁹⁾といわれた漁業であり、当時の薄漁・凶漁の程度は測りがたく、それを絵図で明確に表現できるほどのものかどうかとも判断しにくい。どうも、絵図をみると、描かれた情景が真実を反映しているものと、ついつい見做しがちになる。絵図には過去にあったものやモチーフによって無いものまで描かれてしまうことも、またあったものが省略されてしまうこともある。もちろん、文献史資料にも著者の意図によって、あえて記されなかったり、誇張されて描写されたりしていることがある。史資料批判の難しさである。

とにかく、「江絵図」の作成年代の確定は難しい。しかし、左双の屏風が対になった屏風であることから、ここから絞り込むことも可能かと思われる。時折、許可されたり、文化4年(1807)頃、明山になったこともあったといわれるが、江差の後背地の江差・厚沢部・目名の諸松山のうち、「江絵図」に描かれた厚沢部陪山(松山)が延宝6年(1678)に伐採が漸次許可され、宝暦8年から明和7年(1758~70)にかけて全て留山になり、また文化期(1804~17)に、厚沢部川は鮭の運上漁場となり、下流域に集落が形成された⁽¹⁰⁾ことから、「江絵図」は宝暦8年以前、すなわち宝暦前期の作品と考えてよいのではないか。

また、「江絵図」には蔵町から九艘川町にかけて道沿いに並ぶ商家玄関に掛けられた暖簾が描かれている。『江差町史』資料編には、編纂者の高い見識によって商人名とともに商号や捺印された印鑑までもが丁寧に印字化されており、これで商号を調べると、宝暦期以降、江差に開いた近江商人の店が並んでいることが知りえる。ここから宝暦以降の図と考えて差し支えないであろう。

ところで「江図」には、江差九艘川の河口で弁財型船を建造している図が描かれている。「江絵図」には狭くて小さい九艘川が描かれているだけである。これが事実とすれば、弁財型船の建造は不可能である。寛政元年(1789)に江差を訪れた菅真澄も「えみしのさえき」に「九艘川といふ細ながれの川あり」⁽¹¹⁾と記している。とすれば、九艘川は宝暦末年から明和期にかけての相次ぐ大地震や津波⁽¹²⁾によって影響を受け、狭くて細い河川となったと推測される。そうであると、「江絵図」の描写は先に推測した宝暦前期とは確定し難くなる。しかし、先にも述べたように、絵図のモチーフによって省略したり、大小の書き分けをしたり、無いものを追加したりするこ



ともある。それらの事情を考慮しつつ、江差陪山の描写、商家の商号などから考えて、「江桧図」の描写は宝暦前期と考えるとよいであろう。

3 気づいた点その2

右双「江差浜鮮漁之図」を読むにあたって

江差には、元文4年(1739)に坂倉源次郎(『北海随筆』¹³⁾)、天明3年(1766)に平秩東作(『東遊記』¹⁴⁾)、同6年(1786)に佐藤玄六郎(『蝦夷拾遺』¹⁵⁾)、同8年に古川古松軒(『東遊雜記』東洋文庫27 平凡社 1980年)、寛政元年(1789)に菅江真澄(『菅江真澄遊覽記』2 東洋文庫68 平凡社 1969年)、弘化3年(1846)に松浦武四郎(『校訂蝦夷日誌』2編 北海道出版企画センター、1999年)などが訪れ、それぞれ紀行文に当時の見聞を書き記している。「江桧図」の描写が宝暦前期とすると、平秩東作や菅江真澄が訪れるまでに短くても約20~25年経過している。当時の景観は極端な天変地異や急激な政治的経済的変動がなければ、それほど変わっていなかったと考えるのが自然であり、建物や景観に劇的な変化はなかったと考えるとよいではないか。

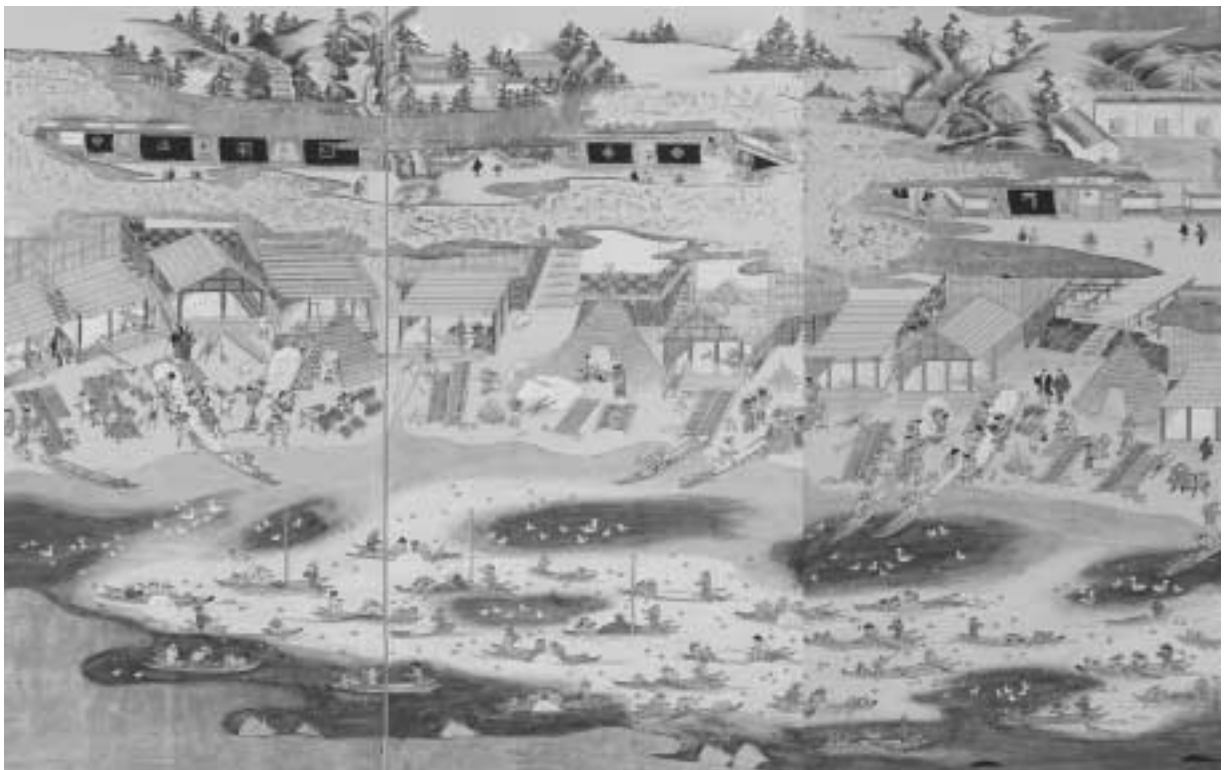
そのうえで、これらの紀行文などを参考に「江桧図」を考証していくと、絵図からは知りえない事実もわかる。たとえば、海岸の近くに板屋根に置石が置かれている商

人たちの立派な木造蔵が描かれているが、この木造蔵について『東遊雜記』には「土蔵も檜板・槓板にて包みまわして綺麗に見ゆ」とある。すなわち、「江桧図」では単なる木造蔵にしか見えないが、それが土蔵で、板で化粧回しを施した土蔵であることが文献からはじめて知りえるのである。ただ、木造蔵に見える蔵が、全部が全部、土蔵であったとは断定できないであろう。板化粧回しの蔵もあったということである。こうした点は例外としても、いうまでもないことであるが、逆に、文字説明だけからでは容易に理解しがたい情景や表現しにくい人々の仕草、道具などがリアルに表現され、理解を助けてくれるというメリットもある。また、当然、描かれてあるべきものが無い場合もある。

いずれにしろ、絵図の読み取りには どのような絵図であるかにもよるが 人間の生活史全般や産業史、政治史などの専門知識が要求される。そうでなければ、絵図を容易に読み解くことは出来ないであろう。

4 気づいた点その3 模写図絵しか無い場合

「江桧図」は模写である。本来、模写は原画を「忠実」に写し取ることが要求される。しかし、実際は模写をする絵師の意図・感情が投入されて、時にはところどころ原画に照らして詳細に比較すると、微妙に異なる場合が



見受けられる。先にも触れたが「江絵図」の原画は不明である。模写の「江絵図」で検討するしかないが、鯨漁に携わる漁民たちの描かれた服装や被り物を詳細にみると、かなり現代的な被り物も散見される。しかも数種類描かれており、それらが当時からあったものかどうかも確認しがたく、疑問に思われるものも多い。絵師の創意・創作が感じられるのである。そうしたなかで、松前蝦夷地を対象にした、幕末江戸風俗事典『守貞謾稿』(東京堂出版、1992年)などのような参考にすべき事典があれば心強いが、無い。唯一、参考になると思われるのが、天明8年～寛政元年の比良野貞彦「奥民図彙」⁽¹⁶⁾などに描かれた東北の民衆の服装や道具などである。絵引を作成する場合、それを時代に則して、どう呼ばれていたのか、あるいはそれを表現する語彙をどうするか、という問題も起きる。たとえば、被り物などを詳細に検討すると、いろいろな被り物が描かれているが、解説する典拠となる事典類がほとんどない。

何を参考に「江絵図」を、否「絵図」を読み解けばよいのか。ぼやきになるが、「絵図」の読み解きにはいつもこうした問題が立ち足る。関連文献の博搜が「絵図」の読み解きの鍵になる。

注

- (1) 北海道 1937年 160～161頁の挿入図、181頁。ただし、『新撰北海道史』第2巻通説1掲載の「松山土場之図」は一部だけの掲載で、河口付近の海岸における鯨加工の情景がカットされている。
- (2) たとえば、『詳解 日本史B』三省堂 1994年 152頁。『日本史B』東京書籍 2003年 201頁。
- (3) 『松前町史』通説編第1巻上 松前町1984年 999～1000頁。
- (4) 五十嵐聡美『アイヌ絵巻探訪』北海道新聞社、2000年 64～68、161～163頁
- (5) 前掲『新撰北海道史』第2巻通説1 目次36頁の付録
- (6) 越崎宗一『アイヌ絵』北海道出版企画センター、1976年再版 101頁
- (7) 前掲『アイヌ絵巻探訪』162頁
- (8) 泉靖一編『アイヌの世界』鹿島研究所出版会 1968年 152頁
- (9) 菅江真澄「えみしのさえき」『菅江真澄全集』第2巻 未来社 20頁
- (10) 『江差町史』第5巻通説1 江差町 1982年 224、386～388頁
- (11) 前掲「えみしのさえき」『菅江真澄全集』第2巻 未来社 28頁
- (12) 「江差町史年表」『江差町史』第6巻通説2 別冊 江差町 17～35頁
- (13) 『日本庶民生活史料集成』4巻 三一書房 1969年
- (14) (13)と同じ
- (15) 大友喜作編『北門叢書』第1冊 国書刊行会 1972年
- (16) 前掲『日本庶民生活史料集成』第10巻 1970年

「江差浜鯨漁之図」(「江差松山屏風」右双)

18世紀中ごろ鯨群来(クキ)に湧立つ江差(北海道松山郡江差町)前浜の鯨差(刺)網漁の情景。背景には鯨場への仕込み、あるいは鯨製品を扱う近江商人店(「丙浜組」)が軒を連ねている。

